

ドラッグストアに勤務する管理栄養士のあり方に関する研究

江口 澄子 (G180001)

指導教員：土田 満

キーワード：ドラッグストア、管理栄養士の知識・能力、内容分析、職場満足度、健康情報拠点

はじめに

増大する社会保障費・超少子高齢社会へ対応するために「高齢者の低栄養・フレイル対策」「地域包括ケアシステム」が、各市町村で実施されることになり、管理栄養士への期待が大きくなっている。

住民からの健康の維持・増進に関する相談に適切に対応し、受診勧奨や紹介等を円滑に行う為、薬剤師以外の他職種が必要に応じて対応することが必要となり、ドラッグストア勤務管理栄養士が増加しているが、管理栄養士の業務実態は不明であることが多い。また、仕事内容、要求される知識・能力に関する調査・研究も極めて少ない。

先行研究では、薬品小売業に勤務する管理栄養士は、健康食品、サプリメントに関する知識が要求され、コミュニケーション能力が必要であることが報告されている。また、良好な職場風土を醸成し、組織への評価を高めるには、職種などの違いを考慮した組織管理姿勢を検討する必要性も示唆されている。

以上を踏まえ、本研究では勤務実態、要求される知識・能力等を明らかにし、地域に根ざしたドラッグストアになるための、働き方、実施したい事業を管理栄養士の視点で検討した。意欲をもって働くことができる環境、専門性を活かした役割も提案する。

方法

1. 調査対象者

A 県に本社を置く、S ドラッグストアに勤務する勤務年数 1 年以上の管理栄養士 300 名を対象とした。

2. 調査方法及び方法

2019 年 5 月に無記名記述式アンケートを実施。3. 分析方法

統計解析には IBM SPSS statistics ver. 24、自由記載の解析には KH Coder を用いた。

4. 倫理的配慮

愛知みずほ大学研究倫理審査委員会の承認を得た。開示すべき COI 関係にある企業等はない。

結果

233 名を分析対象とした。

1. 対象者の基本属性

平均年齢は 24.6 歳、勤務年数は 1～2 年目の者が約 60%、3 年以上の者は約 40%であった。女性が 90%以上を占め、殆どが未婚者であった。勤務場所は店舗勤務が圧倒的に多く、本部は 10%弱と少なかった。勤務の継続意志については、退職の意思がある、あるいは過去にあった者が 80%に上っていた。

2. 現在の仕事内容

85%以上の仕事が「販売」「商品の紹介や情報提供」「レジ業務」などであった。栄養士の専門性を活かした仕事である「栄養指導」は 74.7%と比較的高かったが、より専門的技術を必要とする「講師活動」「栄養価計算」、「献立作成」は低かった。

検討 1. 学生時代

1) 学んで活かされていると感じている科目

臨床栄養学が 79.6%、基礎栄養学、応用栄養学、栄養教育論が 60%以上の者が活かされていると感じていた。食品学・調理学は 30%、経営学、食品流通論・食料経済学は 1%と低かった。

2) 学生時代にもっと学んでおくべき科目

臨床栄養学が 64%と圧倒的に多く、応用栄養学や基礎栄養学は 30%台であった。

3) 学生時代に身につけておくべき能力

コミュニケーション能力、マナー・礼儀、プレゼンテーション能力が社会人として備えておくべきことが 40%以上であった。次いで、専門的知識、語学力で、人間性やディベート能力の必要性は 10%台と低かった。

検討 2. 職場

1. 職場において求められる、あるいは獲得したい事柄

1) 管理栄養士として求められている知識・能力

「健康食品に関する知識」や「サプリメントに関する知識・能力」が最も高く、「販売に関するコミュニケーション能力」「健康食品の説明・販売・比較に関する能力」が続いていた。

2) 獲得したいと考える資格

サプリメントアドバイザーや離乳食アドバイザーが最も多く、次いで、食生活アドバイザー等であった。

3) 獲得したい商品知識

サプリメント、いわゆる健康食品、特定保健用食品、栄養機能食品、専門的商品の知識の獲得が高かった。薬局の主力販売品である医薬品も高値であった。

4) 獲得したい知識・能力

栄養相談・指導が高く、疾病、育児、介護と続いた。

2. 職場に対する意識

1) 職場満足度尺度の因子分析

主因子法・プロマックス回転により因子分析した。

第1因子は『上司との関係性』、第2因子は『自己有用感』、第3因子は『職務と待遇の満足感』、第4因子は『組織の機能』、第5因子は『職場での人間関係』、第6因子は『企業理念』と命名した。

2) 職場満足度下位尺度因子と属性との関連

『上司との関係性』は性別では女性が、研修場所では社内研修が、勤務年数では1年目の者が、勤務場所では店舗勤務者の満足度が有意に高かった。

勤務場所別では、3因子中の6項目に有意差が認められた。『上司との関係性』性の「職場内での指示、命令系統がはっきりしている」「自分は正当な評価を受けている」「人材育成のための制度が整備されている」項目で店舗勤務者の方が有意に高かった。『組織と機能』の「自己啓発を積極的に行っている人が多い」項目で本部勤務者の方が有意に高かった。『職場と人間関係』の「職場の同僚には助け合おうという雰囲気がある」項目では本部勤務者が、「薬局スタッフは皆いきいきしている」項目では店舗勤務者が有意に高い傾向があった。

検討3. 地域

1) 地域住民の健康情報拠点として実施するサービス

店舗では、食や薬と健康に関する情報提供、健康測定、栄養相談等が上位であった。高齢社会に対するバランス弁当等や集いの場の提供も30%を下回っていた。

2) 地域住民の健康情報拠点として薬局における働き

「気軽に安心して相談できる」環境づくりやスキルアップを75%以上が必要であると考えていた。一方、高齢社会への対応として「ケアマネ」や「社協や介護施設との連携」はいずれも20%台と低かった。

3) 地域に根ざした薬局となるために実施したい事業

「特定健診・保健指導」「まちの栄養相談室」は30%以上で、「健康祭り」は次に多く、「地域料理教室」、「町の運動相談室および教室」「健康ランチレストラン」等

も20%以上の者で提案されていた。一方、「地域ケア会議」「認知症カフェ」「配食サービス」等は少なかった。

検討4. 今後の夢（自由記載）

抽出言語と勤務年数との共起から「管理栄養士」「気軽」「お客さま」「相談」が共通言語として出現した。共起ネットワークから「管理栄養士として、地域で気軽にお客様が健康相談に来る活動で存在を認知された」等、9要素に分類された。

考察

職場における『上司との関係性』では、勤務年数1年目の者や店舗勤務者のほうが上司との関係性が良いことが認められた。上司とは店長の場合が多く、勤務1年目の者には店長が直接指導する機会が多いことから、店長の存在が職場満足度に大きく影響していることが推察される。

高齢社会へ対応するケアマネや社協、介護施設との連携は低かった。地域住民の健康情報拠点となるためには、種々の連携が健康情報拠点を作り上げていくために必要であるという認識を高める必要がある。地域に根ざした薬局となるために行いたい事業として、「なんでも栄養相談」等店舗を使った事業が多く、「認知症カフェ」「配食サービス」といった高齢社会における地域活動は低かった。しかし、勤務年数3年以上になると、地域における事業が多くなり、継続してずっと続ける意志のある者も地域活動に前向きであった。

今後の夢の自由記述においても、勤務年数3年以上になると高齢社会に貢献する意の言語が多くなり、社会に対応する管理栄養士による業務のあり方・意識が変化していた。勤務3年以上になると地域に目が向いてくることが確認されることより、地域に根ざした薬局となるためには3年以内の退職者を出さないように、自己達成感を感じられる職場環境の必要性が示唆される。また、3年以上の者をどのように育成するかで、ドラッグストアにおける存在価値が大きく変わり、地域に根ざした管理栄養士の実現が可能になると考えられる。管理栄養士が意欲的に活動する人材育成のためにも会社の組織編成が必要であることが提言される。

参考文献

- 1) 大宮めぐみ他:中国学園大学紀要第11巻1-12 2012
- 2) 櫻井秀彦ら:医療の質・安全学会誌 Vol.6 No.1 2011